文化財をたずねて⑧

《比江山城跡》

比江山の名は、京都から赴任した国司が、故郷の比叡山をしのんで名付けたもので、戦国時代の悲運の将、比江山嘉部介長宗我部親興居城の地である。

長宗我部元親は、後嗣ぎに四男の盛親をたてようと、家中を集めて相談をした。元親の従弟である親興と甥にあたる吉良親実は、長幼の序を乱すものだといたく反対し、ために元親の怒りにふれ切腹を命ぜられた。時に天正十六年（一五八八）のことであった。

親興は、大高坂城熊野権現南に邸宅を工事中であったが、使者の中島吉右衛門、横山修理の二人が、元親の命を伝えた。

「汝親興は、直言して、予に注意してくれたのではあるが、君臣の間には、おのずから礼儀の存すべきであるのに、汝の言は不敬至極、全く礼を失している。これの罪を知り、自らを毀け。」と、これを聞いた親興は

「臣親興は愚直、国を憂うる切なるあまり、身を忘れて直言、公の怒りにふれる。忠言耳にさからうとかや、死をもって怒りをとかん。」

と、刀をとって切腹しようとすると、家人があわててこれをとどめた。しかし親興はこれを制し、

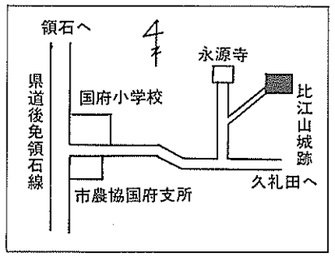
「自分は、政治に野戦に、身を軽んじ君恩を重じて働いてきた。死は命であり、命をお受けせねばならない。決して死を恐れるものではない。」

といって、長宗我部氏の末路近しとなげきながら切腹してしまった。今その魂は、桝形出雲神社の境内に訪れる人もなく静かに眠っている。

親興は死にのぞみ、近臣に罪のない妻子のことをくれぐれも頼んだ。近臣は比江山にいた妻子をつれて、須江村の善勝寺をたよってのがれたが、村民がこれを元親に つげたので、元親は兵を出して、妻子や従者ら六名を須江の川原で斬り、善勝寺の僧もこの無道にいきどおり、自殺し夫人のあとを追った。それ以後この七人を葬ったところには、不思議な事が次々に起こり、人々は七人みささの祟りだとおそれという。

悲運の将、長宗我部親興を祠った比江山神社

比江山城跡は、比江山の東端山上にあって、岡豐城の出城として東をかためるにふさわしい位置にある。山上には、本丸跡や土塁が残り、親興を祠った比江山神社もある。



永源寺住職 島崎利昭さんの話

比江山神社の東側には壕があり、子どもころは、近所の子等と竹林でチャンバラごっこした思い出があり、昔は良い遊び場でした。

二十五年ほど前だと思いますが、七月十七日の夜中十二時近く、境内での青年団の相撲大会が終って、総代さんを送った帰り道のことです。直径一十㌢もある大きな人だまが、掃部介の妻の霊を祠る久次の神社の方角から、比江山に向って飛んでくるのを見ました。それは電球のような色で明るく後光を放ち、比江山神社付近の山にとりつくかとりつかないうちに、パッと消えてしまいました。掃部介の妻の魂が、会いに来たのか、掃部介が妻に会いに行っての帰りかはわかりませんが、うわさでは聞いていたものの、それは驚きました。

これより前にも、ある青年団の若者が、「草履の裏につばをつけ、掃部介を呼ぶと、人だまが飛んで来る」という言い伝えを信じて行ったところ、パッと明るくなって、私の見たのと同じような大きな人だまが現れ、みんなは驚きひれ伏してしまったとのこと。次の日から、その若者はひどい熱が出て、寝込んでしまったということもありました。

善意の箱

東京都小平市の鈴木庄一郎さん（前浜出身）から、老人福祉に役立ててくださいと、社会福祉協議会へ一万三千三百五十円のご寄付がありました。

善意に感謝し、厚くお礼を申し上げます。

子どもたちが鯉つりを楽しむ

久礼田小

季節はもう夏――プール開きも間近にひかえた久礼田小では、「つれた、つれた！」と、鯉つりを楽しむ子どもたちのはしゃぎ声がいっぱい。

六年ほど前、養殖業をしている植野の原總一郎さんの好意で、プールを閉めた毎年十月に鯉を入れるようになりました。それからプール開きまでの約九ヵ月間、子どもたちや先生が、給食で残ったパンなどやって大切に育て、この時期にはずいぶん大きくなっています。

初日の五日は六年生、次に五年生とだんだん低学年になってゆきます。最後の一、二年生になると、水を減らしてつかみ取りをするそうです。つり上げた鯉は、自分たちが持って帰って良いとのことですが、漁獲制限は一人五ひきと決まっています。

お父さんから借りてきたのか、りっぱな竿をさげた子や、竹棒にただ糸を結んだだけの手作りの竿でつる子。隣りと糸がからんでもめてる子や、つりそっちのけで、おしゃべりに花が咲く女の子など、みんな楽しそうです。

原さんの好意によってできた、一味違ったプールの活用法です。

この十八日は、プール開き。今まで鯉が静かに泳いでいたプールには、もうすぐ真黒にやけた大きなカッパたちが、水しぶきをたてて泳ぎまわることでしょう。

鯉つりを楽しむ子どもたち

「入交文庫」の開設を祝う

「入交文庫」の開設おめでとうございます。

平素、市立図書館を利用させていただいている一人ですが、「郷土図書の購入に」との寄贈者のご遺志、大変ありがたいことです。

高知県史抄十巻、長宗我部地検帳十九冊、複製ですけれども高知県史要、藩政録その他貴重な資料のほかに、県出身の政財界人、文学界の人々の伝記や全集など、また講談社の日本文学全集大抄全百十巻も、特別製の豪華愛蔵としてそろっています。

資料類は開架式ですから、必要なものを必要な部数だけ手元に取って調べる便利さもあり、利用上大変好都合であります。

このような良い資料を選択して集書された館員の皆さまがたのご苦労も、並たいていではなかったことと思われ、敬意を表する次第です。

市民の皆さまがたのご厚意による寄贈図書もたくさんあると伺っておりますが、蔵書の置場や利用者の閲覧室も狭くなっており、一日も早く立派な新館が建築されることを祈っている一人です。

「田園都市・土佐まほろば」の南国市です。市立図書館に行けば必ず必要な資料があって、勉強ができるという特徴ある所蔵も今後の課題として考えておられることと思います。（例えば、二期作関係、紀貫之および土佐日記、長宗我部関係、谷秦山一家、また昔の地検帳や申合規約、地割帳などの資料類。）

これらの資料は、まだまだ市内にたくさん所蔵されているかたがいると思われ、図書館への寄贈をお考えくだされば一層充実して、研究者や一般市民の利用に役立つのではないかと思います。

この機会に、図書館の利用を一層盛んにしようではありませんか。

田中滝治（西山）

献穀田で田植祭

新嘗祭に、宮中に一升の米を献上する献穀田の田植えが、六月五日、植田の門田誠一さんの水田で行われました。

今年の献穀者に決まった門田さんは、専業農家として五十年余り稲作づくりに務められ、また農協役員などもされた、農業一筋に頑張ってこられた方です。

午後二時、神事をすませいよいよ田植式。六月ということもあって、周辺の水田はもうすべて田植えもすみ、苗も青々と育っています。しめなわで囲われた一㌃の水田に、門田さんや小笠原市長らが入り、また浴衣姿に赤たすきの早乙女（地元の若嫁さん）も加わり、一本一本ていねいに、「黄金錦」の苗を植えました。

お米作りのベテラン門田さんの行き届いた世話で、秋にはきっとたくさんの稲穂が首をもたげることでしょう。